

## 子どもの発達と人間形成

### The child development and character formation

後藤 瑠美亜

Rubia GOTO

#### 序

現在は都市化が進み、子どもの遊び場も限られた環境になってしまい、その中で子どもは成長してゆく。こうした状況のなかで、子どもが抱える問題は複雑で数多く存在する。

本論文を書こうと思ったきっかけは、現在、高校の教壇に立つものとして多くの問題・課題に直面し本当の自分作りに苦悩している子どもの発するところの叫び、またシグナルを察知することができる能力をつくり、またカウンセリングマインドを充実させたいとの願望からであった。子どもと直接触れあっていて感じたことは、彼らは友達もいるし、毎日それなりに楽しいのに「なんとなく孤独」と感じるが多かったり、「やさしい」のではあるがそれは友人と距離を置いていて、無難に傷つかないようにしているだけで冷酷で残酷な一面をもっている子どもが多数いることである。

現代の子どもの心が病んでいるのは、子どもの心の発達を無視した教育や環境に原因があるといえる。乳児期からの母親の育児にいろいろな問題があったり、また厳しい教育競争の犠牲になってしまって反社会的行動に走ってしまった子どもがいる。登校拒否や「いじめ」も家庭や学校と教育の歪みに原因があって多発しているとみなければならない。

そのために家庭教育や学校教育では、子どもの心が健全に成長するような教育・指導、環境を整えることに最大の努力を払う必要がある。そして子どもの心を正しく理解していかなければ

ならない。

次世代の未来を担う子どもたちの可能性や個性を伸ばし、よい人間性を育てるにはどうあるべきかを追求していきたい。本論文の構成は、一章は人間の発達と自己実現について人間の本質的な特徴をふまえ、この世に生を受けて自己認識をし、また自己実現を果たし発達していく過程について論述した。二章では子どものよい人間形成を行ううえで環境はどのような影響を及ぼすのであろうか。また、発達していくうえで子どもに関わる現在の社会の環境はどうであるのかについて論述した。三章では、子どもの発達に最も深く密接に関わる家庭の中での環境について記述した。現在の核家族という狭い世界の中での育児、親のしつけや子どものおかれている現状について論じた。四章では現在、数多くの子どもの起こす問題が少年犯罪として大きく取り上げられている。そのような子どもの起こす非社会的行動と反社会的行動の原因を追求した。子ども独特の生活の場をとらえ、そこでの人間形成について論述した。

本論文では子どもの発達と人間形成における重要な諸問題を考察し、論述した。そして将来教育者を目指す者として子どもと教育、または養育者を見る目を鍛えたいと考えている。

#### 1章 子どもの発達と自己実現

##### 1 人間的発達と成長

子どもは日々変化し、その身体、生理、感情、知能などの成長、発達には目覚ましいものがある。生まれたばかりの頃は、大人と食べるものも違い、主としてお乳を飲んで静かに眠っているが、

3歳までには、一人で動き回り、基礎的なことばを話し、行動する基本的な生活習慣を身につけて徐々に人間の発達を進めていくようになる。

このような発達の過程は、誰にでも見られるものであり、ごく自然のこととしてとらえられている。しかし、このことのなかに人間の発達の原理や法則が隠されており、子どもの人間的発達に向けて重要なことが秘められている。

人間の子どもの大きくなることを私たちは「成長した」とか「発達した」というが、この場合の「発達した」とはどういうことを意味するのであるか。また、「成長」と「発達」とは、どう違うのであろうか。成長と発達とは、たいい同意語として使われるのであるが、厳密には成長は、主として固体の発育による変化を系統的・量的にとらえる概念である。

発達は主として、成長的变化を完態への過程として把握する場合の概念である<sup>(1)</sup>。

さらに、発達の事実は直接的には観察されていない。観察されるのは成長的事実であり、その比較分析によって、発達の事実が構成されるのである。したがって発達は一つの観点であり、成長的事実、あるいは、もっとひろく一般に比較的ながい時間経過のなかにおこる事象の変化を完態に発展する機能的な連関過程として体系化する方法でもある。

このように、発達は年齢の経過とともに現れてくる個体の量的変化のみを意味する概念ではないのである。また、現代の代表的な発達の定義ともいえる考え方として、発達は成長と異なり、個体と環境の継続的な相互交渉を通して、さまざまな機能や構造が複雑に分化し、それがさらに、統合され、個体が機能上より有能に、また構造上より複雑な存在になっていく過程ととらえるということが、今日、一般に受け入れられている考え方である。

そして発達は、いつからはじまり、いつまで続くかについては、胎児も環境としての母体の影響を受けるし、老年期になっても新しい学習が可能であることにみられるように、発達は、受

胎の瞬間から死に至るまで続くと考えることができる<sup>(2)</sup>。

ところで、人間の発達の問題を考える場合、人間のさまざまな特質を明らかにすることからはじめなければならない。人間の本質的特徴を考える場合に「人間と動物の違い」は何であるかという、基本的なところに戻って考えていくとする。人間は、ことばを持っている、人間は理性を持っている、人間は火を使う、人間は二本足で歩く等の特徴をあげることができる。

たしかに、これらのひとつひとつが人間と動物とを区別する大切な特徴であることに疑いはない。だが、「人間と動物を区別する決定的なものは何か」と問われるならば、この答えは容易ではない。というのは先にあげたどれをとっても決定的であるとは言えそうにないからである。

ところで、生物としての人間は、生きている限り、飲み食いなどしなければならない。このあたりまえの事実から出発して、人間と動物の決定的な違いを鋭く指摘したのは、マルクス(K・Marx)とエンゲルス(F・Engels)であった。彼らによれば、人は人間を意識によって、宗教によってそのほか、好きなものによって動物から区別することができる。しかし、人間自身は彼らの生活手段を生産し始めるやいなや、動物とは別なものになり始める。」

人間は生きていくために食物や飲物、そしてそれらを手に入れるための生活手段を自らつくりだす。これに対し、動物は自らの糧を自然のなかから直接手に入れる。このように、生活の仕方そのものの中に人間と動物との本質的な相違が見出されたのである。

こうして私たちは、誰も疑うことの出来ない前提、人間は生きて生活しているという前提から出発して、生活手段を作り出す活動、つまり生産活動(労働)こそ、人間と動物を区別する決定的なものだということに気づくのである。

そしてこの生産活動の発展ということと、言い換えれば、これによってつくりだされる生活

手段の発展ということ、これが実は、人間の歴史であったといえるのである。また、この人間の本質的特徴である生産活動こそ、人間の能力を歴史的に発達させた大きな要因であると言える。

人間は進化の過程で、人間をとりまく自然を利用した。例えば、自然の石が「小石」になったとすれば、そのときそれはすでに、人間の手が加えられ、人間の能力が対象化されている。つまり、自然の石は、いわば人間的な石となったわけである。この意味において、人間の生産活動は、自然のうちの人間的能力を対象化する活動、すなわち自然を人間化する活動だと言われているのである。

## 2 自己認知と自己実現

子どもは1歳の前半ころから、いわゆる社会化の問題が明確になっていく。社会化とは「あらゆる社会集団に属する個人が、その集団が共有している行動様式、知識・技能、思考、態度、動機などを身につけることによって、集団の一員となるように導かれていく過程」のことである<sup>(3)</sup>。

その具体的内容は後に述べるが、それは大人が子どもに対して意図的に行うしつけよりは広い概念であるといえよう。

意図的な社会化が始まるのと同じ頃に、子どもの自己認知も発達する。そして、対象化された自分(自己)だけではなくて、行動し、感じ、考え、もくろみをもつ主体としての自分(自我)という感覚が育っていく。そのような自分と環境のぶつかり合いと、それによる子どもと養育者の双方における変化が、幼児期前半のもうひとつの大きなテーマとなる。

社会化が人間の発達にとってどのような役割を果たしているかは、「全く社会化されていない子ども」という架空の例を考えればすぐに分かるであろう。その子どもは、飲食・排泄・睡眠・着脱衣・清潔といった基本的欲求充足のための行動も他者とのかかわるための対人的・社会

行動も所属する社会集団で標準される様式から大きくずれたものとなるだろう<sup>(4)</sup>。

そのような子どもは集団の一員として受け入れられない。そして、その子どもも非難・攻撃を受けたり仲間はずれになったりするが、それよりもまず、その子どもの親が厳しい非難を浴びることになる。なぜなら、われわれの社会では、子どもを幼い時から社会化していくのは、基本的には家庭つまり親の責任だとされているからである。

そのような社会からの養成を受けて、親はおおむね子どもが1歳半頃になると社会化の働きかけを始める。前述の説明は集団の一員として受け入れてもらえるために必要なことを身につけるように子どもを導くこと、すなわち子どもを社会に合わせる(同調させる)という、社会化の重要な側面に関するものであった。社会化のこの働きによって、社会に秩序が保たれ、また集団が共有する行動様式、価値、態度、あるいは知識・技能が次の世代に伝達されるのである。

しかし、社会化の働きには、もうひとつの重要な側面がある。前述の子どもは後になって、この世に一回だけ生まれてきたことの意味を確認できるであろうか。それは無理であろう。なぜなら、自分が属する社会集団と結びつかないで、この世の中で自己実現を遂げて、自分という存在がもつ意味を確認することは不可能だと思われるからである。つまり社会化は、社会集団の中での個人の自己実現を可能にする基盤としても欠くことのできない働きを持つのである。

次に、自己と自我の発達について考えてみることにする。まず、乳児は感覚器官を働かし、運動的行為によって、外界に働きかけることを通して、世界の認識を高めていく。それとともに、外界に影響を及ぼすことのできる存在だということも、だんだんと分かっていく。また、他者との相互作用を通して、子どもは効力感を獲得していく。このような経験は、行動、思考、感情の主体としての自分という感覚を浮か

びあがりやすくするだろう。

従来、3(2~4)歳児に目立つ反抗は自我の目覚めの現れとされてきた。しかし、自我の萌芽の出現はもっと早いものと思われる。例えば、ハサミで遊んでいる8,9ヶ月児から「危ないからちょっと貸してね。」とそれを取り上げると、その子は泣き出すかもしれない。しかし、別の面白いものを渡されたら、たいていの子どもは間もなく泣き止むだろう。

ところが、もう少し年長の子どもは、その別のものを放り出して泣くことが多い。さらにもとのハサミをすぐ返してもらってそれを投げ出し、ますます激しく泣きわめくこともある。

このようなことは1歳前半から始まることもあり、1歳の前半の内に目立つようになることが多い。それは取られたという事態の理解が進み、情動反応が持続的になることだけによるのではない。自分のもくろみ、「つもり」が発生し、それが思うようにならないことへの拒否、抗議反応でもある。3歳を中心として、「強情期」、「第一反抗期」と呼ばれてきたものは、子どもなりのもくろみ、意図通りに事柄が進行しないことに対する自我の反応と解釈である<sup>(5)</sup>。

次に自己認知について、客体化、対象化された自分の側面を自己というとする、自分が自分だと分かる自己認知は、1歳半から2歳にかけて成立すると考えられている。ワロン(Wallon・H)の自己認知過程についての仮説を証明しようとした鏡像を用いた実験結果によると、2歳を過ぎるころになると幼児は、自分の鏡像が虚像であることを理解できるようになり、鏡に映った自己像についての認知が成立するのである。普通には自己よりも他者の方が早く対象としてとらえられるのであろう。事実、保育所の乳幼児に顔写真を見せた我が国の研究で、自分よりも仲間の認識の方が早期から成立することを見出したものがある。

また、1歳を越えてしばらくした子どもは、日ごろ接触している他者を十分に区別していて、自分の要求と状況応じて、適切な相手を選んで

反応することが知られている。

さらに精神発達が進むにつれて、子どもは他者を知っている人、知らない人、男、女、大人、子どもといったカテゴリーに分けてとらえるようになり、自分をそれと関係づけていく。それによって自己認知も発展して、自己意識や自己概念と呼ばれるものが発達してくる。それは、認知発達を基礎とするとともに、男らしさ、女らしさなど区別して子どもに教えていたり、奨励、禁止などを用いて働きかける社会化の作用の結果でもある。注

次に自己実現とは何か。自己実現という用語はマスローによって提唱されて有名になったが、彼が(1951年に)ブルックリン大学を去ってブランディス大学に移ったのちに、たまたまそこでゴールドシュタイン(Goldstein・K)客員教授に出会ったときに考察されたのが始まりである。

ゴールドシュタインは「有機体の上部構造」という著書<sup>(6)</sup>で、有機体の力動性に関連して自己表現について述べている。彼は有機体もっている唯一の動機は自己表現への動機であると考えた。たしかに有機体には飢えとか性とか、権力とか、好奇心といったさまざまな動機がみられるが、それは人生の至高の目的、すなわち自己実現のあらわれにすぎないとしている。人が飢えているときは、食べることで自己を実現するのであり、権力を熱望するときは、権力を掌握することによって自己を実現している。

このように、全有機体の自己実現の先行条件があるときには、個々の欲求の満足が前面にあらわれてくるが、人間の創造的傾向をあらわす真実の要求は自己実現であると考えている。

明らかに、ゴールドシュタインの影響のもとにありながら、マスロー(Maslow・A・H)自身は彼が学んだ行動主義欲求論をも加味して「欲求体系」をもとにした自己実現論を樹立した<sup>(7)</sup>。

ゴールドシュタインが自己実現欲求と有機体の諸欲求を、内面的なものと外面的なものに分

けたのに対して、マスローは最も次元の低い動機として、食物、水、空気、睡眠、性などの、「生理的欲求」を挙げている。このような生理的欲求が満足させられると、より高い次元の安全、安定、保護、秩序などを求める、「安全欲求」によって動機づけられる。この安全や安定が満足させられると、人々は集団に所属し、愛し愛されたいという、「所属と愛情の欲求」がおきてくる。幸いにも愛情や所属の欲求が満たされると、さらに「尊重欲求」で動機づけられている。これは他人から尊重されるということと、自尊心の両面を含んでいる。これらすべての欲求が満たされると最高の欲求である「自己実現欲求」が起きてくるのである。

マスローによれば、自己実現とは、われわれの能力の最高の発達活用、すべての資質や力量を発揮する意味で、低次の諸動機に対して「高次動機」と呼び、人格成長、人格表現、成熟、発達の諸欲求を含んでいる。人間のこの高次動機を満たさなければ、挫折や不安を感じ、自分の平静を保てず、精神的に健康であるとはいえない。注

したがってこうした自己実現はすべての人に可能というわけではなく、約1パーセントの人で60歳以上にならなければ実現に到達することは困難とされている。

こうした人物として、マスローは自分が直接会ったゲシュタルト心理学者のヴェルトハイマー(M. Wertheimer)や人類学者ベネディクト(R. F. Benedict)を観察して自己実現した人物のモデルを発見し、さらに歴史上の天才や英雄、例えば、リンカーン(A. Lincoln)スピノザ(B. Spinoza)、ゲーテ(J. W. Goethe)など49名の伝記を精査して次のような特徴を見出した。

- ① 彼らは現実的な指向性を持っている。
- ② 彼らは自分自身、他人、自然界を受けられている。
- ③ 彼らは多くの自発性を持っている。
- ④ 彼らは自己中心的ではなく、問題中心的である。

- ⑤ 彼らは孤独を保ち、プライバシーへの欲求を持っている。
- ⑥ 彼らは自律的で独立している。
- ⑦ 彼らは人や事物についての鑑賞が新鮮でステレオタイプではない。
- ⑧ 彼らはかならずしも宗教的な特色をもたないが、神秘的で霊的な深い体験を持っている。
- ⑨ 彼らは人類との一体感を持っている。
- ⑩ 彼らは少数のグループと親密な関係を分かち合い、表面的よりも深い感情的なつながりを持っている。
- ⑪ 彼らの価値観や態度は民主的である。
- ⑫ 彼らは目的と手段を混同しない。
- ⑬ 彼らのユーモアは感覚的敵意に満ちたものではなく、哲学的である。
- ⑭ 彼らは非常に創造的である。
- ⑮ 彼らは文化への同調に抵抗する。

というものである。

このようにマスローのいう、自己実現した人とは、低次元の欲求の満足に汲々とした利己主義的な人ではない。

彼のいう自己表現とは、自我の拡大であり、自己と他者との融合と統一であり、外界との一体化であって、彼はこのような境地を「至高経験」(peak experience)と呼んでいる。

## 2章 人間的発達と環境

### 1 人間的発達と発達環境

誕生した人間の子どもは、ひとりでは食物を採すことも危険をさけることもできない、全く無能な存在として生まれる。もちろん歩くことも、ことばをつかうこともできない。このような人間のこどもは素質・能力からいくつかの基本条件をもち、生育過程のなかで生活手段を自らつくりだすほどに成長、発達し大人になってゆくのである。

その基本条件のうちの基本的な第一は、子どもに人間的な環境が与えられるということである。それまでの世代のさまざまな能力は道具な

どの物質的なもの、科学や芸術などのことばや作品で表現される観念的なものなどの中にたくわえられている。子どもはこのような環境の中に育ってはじめて自分の人間的素質・能力を発達させることができる<sup>(8)</sup>。

実際に子どもは生まれたときから日用品、衣類、またことばなどで表現される観念的なものなど、要するに人間的な環境に取り囲まれて育つ。さらに子どもは自然現象とさえも人間的環境を通していろいろなかたちで出会う。衣服は彼を寒さから守り、人工照明は夜の暗闇を追い払う。

もし、このような人間的環境を欠くならば、子どもは決して彼の人間的な発達をとげていくことはできない。アヴェロン野生児「ビクトール」、狼の育てられた「アマラとカマラ」など、このことの例証でもある<sup>(9)</sup>。

こうした意味で、人間的環境は、子どもがわがものとするべきさまざまな能力形成の宝庫、つまり子どもの発達の源だといえる。

しかし、人間的な環境がそれだけで子どもの能力を発達させる力をもっているかというところではない。それはただ子どもが人間的な発達を遂げていくために、子どものまに習得すべき課題として与えられているにすぎない。

第二は子どもの前にこの課題をすでに自分のものとしたおとながいるということである。これは子どもの能力は大人と共同の行為によってしか、さらにひとくちに言えば、社会的にしか形成されないということでもある。子どもに与えられた課題が子どもにとって自然的なものから人間的なものへと移行していく過程は、どのような課題であろうと必ずある。例えば、子ども初めはことばを一定の物理的性質を持つ音として聞き、そのあと初めてそれを何ものかを意味する人間的な音として聞く。

ともかく、いずれの場合においてもそこに必ず見られるのは、大人の介在、言い換えれば社会的な媒介である。そして、「生まれたての赤ん坊の泣き声が一人（ときには何人も）の大人

を走らせる」といわれるように、人間の子どものは初めからこのような社会性になっている。こうした意味で、大人の育児、保育などへの介在は子どもの発達にとって不可欠の条件だといえる。

しかし、大人の介在があれば、それで子どもの能力が形成されるかというところではない。それは、言うまでもなく子どもの発達にとっての単なる援助者にすぎない。

第三に、子ども自身の主体的、能動的な活動、つまり子ども自身が与えられた課題に自ら立ち向かうということである。

言うまでもなく、人間環境のなかから、その中にたくわえられているそれまでの世代のさまざまな能力を取り込んでいくのは子ども自身である。この過程は、ほかならぬ子ども自身の活動によってしか進行しない。さまざまな困難や苦労をとまなう子ども自身の活動は子どもが人間的な発達を遂げていく際、いかなる場合においてもさけられない。もし、これらを欠くなら、水につかったことのないものは、泳ぐことが出来ないように、子どもの能力は決して形成されないのである。

こうした意味で、子どもの発達にとって最もあたりまえで、それゆえに最もたいせつな子ども自身の活動の発達の原動力とする。

これまで先に述べてきた(1)子どもが我がものとするべき素質・能力の発展の源としても人間的環境(2)子どもの発達にとって欠くことのできない援助者としての大人(3)発達の原動力として子ども自身の主体的な活動、の三つの要件が子どもの発達にとっての三大基本条件であるといえる。そしてこの三つの条件が適切に準備されるなら、子どもは円満な人間的な成長、発達を立派に遂げていくことが出来るのである。

## 2 発達環境としての社会的環境

まず、地域社会、もしくはコミュニティ(community)とは、地形や行政単位などで区切られた単なる地理的空間ではない。そこに居

住する人々の間に、習慣的生活様式、自治的慣行、社会的信条や規範などが共有されている、心理的、社会的、文化的空間でもある。地域社会という環境も家庭と並んで非常に大きな影響を子どもの発達に与えてきた。

子どもにとって地域社会とは、家庭という私的な空間と学校という公的な空間との間にあって、十分知り尽くしているわけではないが、しかし、まったく未知というわけでもない。私と公が混ざり合った不思議な空間である。

この空間は子どもにとって、何よりもまず自由にのびのびと遊べる場であった。遊びは子どもの生活そのものであり、子どもは遊びを通して多くの能力を獲得していく。地域での遊びは、家庭や学校での遊びとはまた違っていて、いろいろな役割や立場をもって異年齢の混合集団をベースに展開されることが多い。このような形での役割を自覚させ、リーダーシップを発揮させることで自信を与え、幼い子どもにとっては、年長児をモデルとして、人と人との付き合い方などを学習していく機会を与える。じゃんけんの結果に従わなければ仲間に入れてもらえないなど、お互いに順番を守らないと楽しく遊べないといった、体験を通して社会的ルールを身につけていくとともに、連帯や協力の大きさを理解していくのである。

地域社会の中で、子どもが受け取るすべてのものが望ましくないものとは限らないが、このような体験によって社会の中で生きていくために必要な知識や技術をごく自然に習得していくのである。

ところで、最近の子どもたちが外で遊んでいる姿を見ることは、昔に比べめっきり少なくなったと言われている。近年の急速な都市化の波は、地域の自然環境を破壊し、ビルを建て、道路を整備した。その結果、子どもたちから安心して遊べる空間を奪ってしまったのだ。

もっとも、これは遊び場だけの問題ではない。現代の子どもたちの生活そのものが大きく変化してしまったことにもその原因がある。今の子ども

たちにとって遊ぶためのたっぷりとした時間と場所、それに仲間を共有しあうことが非常に難しくなっているからである。学校から帰ってきて塾や習い事に行くまでのわずかな時間が唯一の遊べる時間であり、たとえ時間と空間があったとしても、一緒に遊べる友達がいないのである。友達と遊ぶためには、あらかじめ電話で予約をとらねばならない。遊びに必要なだとされる時間、空間、仲間のいわゆる三間がなくなった子どもが、一人ぼっちで室内で短いこまぎれ時間で遊ぶとすれば、テレビを見たり漫画を読んだり、テレビゲームをしたりするしかないだろう。このような環境では生の遊び体験が得られにくいし、社会性も育ちにくくなる。

ところで、地域社会は、家庭、学校と並んで第三の教育の場といわれてきたが、子どものこうした遊びや生活の変化を見ると、かつての地域社会がもっていた発達環境としての力が弱まっていることを指摘せざるをえない。子どもたちの問題行動が目立ちはじめ、家庭でも学校でも彼らを十分かかえきれなくなってきたといってもよい。自分の住む地域社会の問題に目を向け、豊かな社会をつくり上げていこうという住民の意識の高まりは、子どもの遊びや生活の見直しを必然的に迫るものであり、弱体化している。家庭機能を補完する役割をも果たすであろう。また、学校週5日制の完全導入の実施にもなって、望むと望まざるにかかわらず、地域社会の重要性がますます大きくなっている。

子どもを地域社会の一員として正しく位置付け、他人の子どもにも力をかし、時には叱り、生活者として子どもなりにその役割を果たしていけるような条件をつくっていくことが、大人に課された責務なのである。

### 3 精神発達とパーソナリティ

子どもは大人になっていく。しかし、子どもが大人になる過程にはそれぞれの子どもにはたくさん邪魔や分岐点やまわり道がある。子どもが普通たどる主な方向は、しばしば不確実で

あり、すすんでゆくのをためらわざるを得ないような場合さえもある。しかし、他の偶然的な多くの機会には、努力かあきらめかのどちらかを選択せざるを得なくなる。このような機会は、環境—人間の環境と事物の環境—にそのみなもとを発する。

社会のなかで子どもは、好むと好まざるとに関わらず、母親や隣人やいつも顔を合わせている人々や、たまにしか出会わぬ人々や学校などのような多くの接触、さまざまな関係と構造、制度などによって、養われている。言語活動のおかげで子どもは自分と自分の欲求との間に、および自分と他人との間に障害や道具を置くことが出来る。

そしてこの障害を避け、この道具を獲得しようとしてとめる。また、対象を避け、この道具を獲得しようとしてとめる。また、対象—おわんやスプーン、洋服や電気やラジオのような、何よりもまず、子どもにとって身近なよく慣れた対象や、きわめて古い技術、ならびに、きわめて新しい技術は子どもにとって邪魔になることもあれば、問題になることもある、また補助となることもあるのである。これらは子どもを拒否することもあり、子どもをひきつけることもある。こうして、これらは子どもの活動を仕上げていくのである。

要するに、環境は結果的には大人の世界を子どもに強制する。このために、精神が適切に形成されていくさい、それぞれの時期にある一画性が見られる。だが、大人が仮定するものだけを子どものなかに、認め、そのほかのものは何も認めないという権利は、そこからはでてこない。何よりもまず、子どもが自分を大人に同化していくやり方は、大人自身がつかっているやり方と全然違う。大人が子どもをしのいでいるとするならば、子どもも大人とは異なった子どものやり方で大人をしのいでいるのである。

子どもは他の環境では別の仕方では用いられるような心理的段階を持っている。大人の持つて

いる心理的手段の多くの欠陥は、社会集団によってすでに克服されてきた。しかし、子どもの多くの心理的手段のなかには、このような欠陥がふたたびあらわれることがあるのである。

また、子どもの年齢がいくら進んでも環境は基本的にいつもおなじものであるということとは絶対でない。環境は、子どもが自分の欲求を満たすためには自由につかう手段に影響を与えるすべてのものから成り立っている。したがってこのことから環境はそれにもとづいて子どもの活動がおこなわれ、規則づけられていく刺激の全体であるとさえいえる。

人間が発達していくうえでのもろもろの発達段階は、精神発達のそれぞれの一つの時期であると同時に、行動の型でもあるのである。

### 3章 人間的発達としつけ

#### 1 家庭環境と社会的発達

人の子どもも生物である以上、まず生物が成長、発達する基本的な過程に則って育っていく。胎芽、胎児の頃はまさに生物の法則に従いつつ成長、発達をしていく。生後も新生児の頃(生後28日未満)にもなるといわゆる‘あやし’に反応して笑うなど「人」らしさの発達徴候がみられるようになり、子どもの人的環境、養育方をはじめとし、成育環境が子どもの知的、精神機能の発達につれ、より直接的に影響しはじめる<sup>(10)</sup>。

子どもが自然の一部である限り、知的・精神機能の発達に関してもどんな成育環境が子どもの発達に見合うものであるかは法則性が存在する。それを無視し、育てる側の場合や考えだけを優先していれば必ず育ちに遅れや歪みが生じてくるのである。

子どもの成育環境にとって、一番重要といえるのが家庭環境である。子どもは生まれて出生後約1～2年は全面助動的な世話が必要である。子どもは生理的な欲求を満たすことは生命維持や身体面の健康維持に必要であり、また身体面の成長・発達に必要である。



では、それだけでは生物としてのヒトの子どもは人間的に育たない。「人」に育てるための必要で適切な育児内容がなければならないのである。すなわち育児を担う者の、子どもに対する優れた精神的触れ合いがなければ「人」への育ちは保障され得ない。精神的な発達が芽生えまた、急速に進んでいく幼少期にこそ優れた心理、感情の精神的触れ合いが大事であり、それが子どもの精神発達を開花させるのである。優れた精神的触れ合いとは、育児を担う者の心と子どもの心が響きあう触れ合いである。

生来的に母性を備えた母親は、子どもに対して世話行動をとるが、その中で自然と精神的な働きかけも行い、子どもと心を通わせる。精神的働きかけに子どもが反応し、その様子を母親が感じ取ることによって子どもの心と響きあう心が育まれ、子どもに対する深い愛情が培われていくのである。母親の人としての母性が発達し、育児を楽しむことができ、育児を楽しんで母親が幸せならば子どもも幸せなのである。

しかし、現代社会において母親の育児ストレスという問題が深刻になってきている。この育児ストレスから子どもの虐待へとつながるケースもあり、子どものよい人間発達を促す育成環境からかけ離れてしまうのである<sup>(11)</sup>。

それでは、なぜ今、母親に育児ストレスが多いのか。その理由・原因は単純なものではなく、現代的な様々な問題から生み出されているものである。一つに核家族化があげられる。核家族化は戦後の産業構造の大きな変化に伴って進行した。農業などの一次産業を中心とする産業構造から生産業、サービス業という二次、三次産業が主体の産業構造に大きく変化し、多くの人々が伝統的な田舎を離れ、労働者となって都市部の新興住宅に移ってそこに核家族を形成していった。核家族は地域的連帯に乏しく、それぞれが孤立に似た状態に置かれている。都市では同じ集合住宅で比較的近くに住みながら希薄な人間関係になってきている。

また、核家族の場合の子育ては母親が一手に

担わなくてはならない場合が多い。以前のように三世大家族などが多かった時代では、年寄りが子どもの面倒をみて、母親が育児から解放される時間を持つこともできたし、兄弟数の多い時代でもあったから、年上の子どもが年下の子どもの面倒をみたり、子守をすることも日常的であった。

また、地域の連帯が強く、事情によっては気軽に近所の人に子どもを預けることもできた。近所の年下の子どもが幼い子どもの子守をしてくれたり遊んでくれたりもした。すなわち子育ての手が分散していたのである。子どもも、多くの人と接することで社会性を身につけ価値観を育んでいったのである。

しかし、核家族の専業主婦の場合は、子どもから一時も解放されない状態に置かれる。乳児は活動性がまだ小さく活動範囲も狭いが、幼児期の子どもになると活動的でよく動き回り目が離せなくなる。母親は疲労や緊張を起こしやすく、それを癒す時間を持てないとなるとストレスが高じて神経症的な状態に追いやられる。その他にマニュアル育児や夫の育児不参加があげられる。マニュアル育児は、母親の周りの膨大な育児情報の受け止め方に問題が生じていることである。これは過去においてなま身の子どもの接触体験が少ないことや、祖母などの育児経験者がいないことから、育児書などの育児情報に頼るわけであるが、そこに書いてあることは平均的、一般論的であり、多くの子どもはそこに書いてある通りでない面を多かれ少なかれ持っている。

しかし、子どもに関するなまの情報が乏しい孤立した育児の中では、どうしても育児情報の受け止め方が断片的、近視眼的になってしまって、一人の子どもの育ちを示すダイナミックな状況に目が届かない。そのため心配しなくてもよいことが心配の種となって、これがまたストレスの原因になるのである<sup>(12)</sup>。

次に夫の育児不参加である。わが国の社会では夫が外で仕事をし、妻が家事、育児をすると

いう意識が変化しつつあるとはいえ、まだまだ一般的である。その一般的な意識が、夫の育児参加をしにくくしたり、また、夫自身が育児から逃れようとする場合の拠り所ともなるのである。実際的には妻の育児の「大変さ」に共感もしない夫が少なくない。このことが夫への不満を伴い、育児から逃れられないという閉塞感を強め、育児ストレスを増強させる結果となるのである。

そしてこの核家族という密室は児童虐待の温床となっているという現状もあるのである。この育児ストレスや育児忌避などから虐待が起こるのである。親から虐待されることは子どもにとって惨めで、かつ恐ろしいことはない。虐待は子どもの精神発達を大きく妨げ、心に大きな傷あとを残すのである。だが、しかしこの児童虐待は年々増加の一途をたどっているのである。

## 2 愛着と人間形成

発達心理学に行動主義の考え方が支配的であった頃、母親の機能が食事を与えることだと考えられていた。しかし、1950年代頃から新たな視点から母親の機能を示唆する知見が明らかになってきた。

ローレンツ (Lorenz・K) はカモの雛が孵化した直後に目にした動く対象を親だと思っているかのごとく歩く現象を見出し、これを刻印づけ (imprinting) とよんだ<sup>(13)</sup>。

また、ハーロウ (harrow・H・F) は、小ザルの実験で、母親のもつ食機能と接触機能の実験的検討を行い、スキンシップの重要性を指摘している<sup>(14)</sup>。

この知見をふまえ、ボウルビィ (j・Bowlby) は母親は食機能だけでなく、子どもを略奪者から保護し、生存に必要な行動様式を教える、子どもにとって特異的な存在としてとらえた。ボウルビィは、愛着 (attachment) を乳児と特定の人 (多くの場合、母親だが、特に母親でなくてもよい) との間の愛情の絆として定義し、母

親への愛着の形成が、乳幼児期での最も重要な発達課題であると考えた。

乳児はおしめをかえてもらったり、ミルクを飲ませてもらったり、抱っこしてもらったり、遊んでもらったりという母親とのかかわりを通して、母親に対して「この人は自分を愛してくれるんだ」、「自分がなにか要求したときに、常に願望を叶えてくれるんだ」「信頼できるんだ」という感覚を抱く。この感覚が愛着である。これは母親に対する基本的信頼感 (basic trust) といってもよい。「母親から愛されている、母親は信頼できる」という感覚は母親以外の人も情緒的交流を持ちたいという欲求へと結びついていくのである。母親に対して健全な愛着を形成できた子どもは徐々に父親、祖父母、兄弟といった身内の人へ、さらに幼稚園や学校に入ると仲間や先生への愛着の輪を広げてゆくのである。まず母親への健全な愛着の形成、すなわち母親を信じられるということがその後の対人関係能力の形成にとって重要な意味があるのである。

このように母子関係の形成が子どもの誕生後、最初の重要な対人課題であるとする立場は、発達の「斬成説」と呼ばれる。そして、幼少期に養育の中心となる母親の子どもとの愛着関係は対人関係を形成する基礎となる主張をエインスワース (Ainsworth・M・D・S) が実験的に確認した。すなわち、1歳時の母子の愛着とその後の対人関係について調べ、安定した愛着を示した子どもは成長した後も攻撃的であったり回避的であることが少なく、より親和的であると述べている<sup>(15)</sup>。またルイス (Lewis・M・etal) は子どもは誕生直後から社会的ネットワークの中に位置付けられ、多様な相互作用を行うという社会的ネットワーク理論を提唱している。この理論は斬成説と異なり、子どもが誕生後に多くの人から受ける影響を重視している。ネットワークのなかに成人の養育者、兄弟、友達などが含まれ、子どもはそのネットワークとの相互作用を通して関係を形成していく。

したがって、母子関係だけではなくその他の養育者との関係重要になる。母親と同じく子どもにとって重要なのは父親である。しかし、父親は母親に比べ子どもとの接触時間が短いため、子どもとの相互作用の仕方には違いがある。ラム (Lamb・M・E) が幼児の家庭において両親と子どもが遊ぶ様子を観察した結果によると、母親と父親では遊びの種類が異なる。母親は伝統的な遊びが多いのに対して、父親は身体的遊びが多い。遊びに限らず、性役割、知的発達などに対して母親と異なる形で父親は影響を与える。父親が子どもと関わる機会が多いほど、安定した父子関係が形成されるのである。

また、子どもは両親の影響を受けて育つが、夫婦の関係も子どもにとっては重要である。子どもにとって両親からの働きかけが統一的であることが望ましい。そこで子どもに関して両親の意見が調整され、両親が自分の役割を認識することが重要である。

### 3 発達課題と教育

#### —青年期教育を中心として—

人間はそれぞれの特徴的な発達段階と過程を持ちながら成長・発達をしていく。そして、それぞれの過程には、それに相応しての身体的・心理的・知的・社会的等々の固有の課題を持ち、それをうまくこなし、あるいは、我がものにしてつつ発達していく。その過程ごとに既成のものとして新しい課題との葛藤を引き起こし、それを一つひとつ乗り越えながら発達していくのである。こうした葛藤—危機を迎える頂点は青年期である。

青年期をモラトリアム (moratorium=執行猶予期間) として、危機・葛藤の頂点として、また現代的課題として詳細に論じたのがエリクソンであった。彼は精神分析学的立場から、フロイトのリビドー説をもとに、発達段階論と発達課題を考えたのであった。彼はそれを、①乳児期 (基本的信頼 対 不信)、②早期幼児期 (自律 対 恥と疑惑)、③遊戯期 (自発 対 罪悪感)、

④学齡期 (勤勉 対 劣等感)、⑤青年期 (同一性 対 役割分担)、⑥若い成人期 (親密さ 対 孤独)、⑦成人期 (生殖性 対 停滞)、⑧成熟期 (自我の統合 対 絶望)、などとした。①～⑧までの( )内はそれぞれの基本的・中心的発達課題である。そして危機・葛藤の青年期的課題として、〈時間期絶望 対 時間拡散〉、〈自己確信 対 同一性罪悪感〉、〈役割実験 対 否定的同一性〉、〈達成の期待 対 労働マヒ〉、〈同一性 対 同一性拡散〉、〈性同一性 対 両性的拡散〉、〈指導性の分極化 対 権威の拡散〉、〈イデオロギーの分極化 対 理想の拡散〉などをあげている。

さて、エリクソンは、アイデンティティー (identity) の確立を青年期における重要な課題としている。もともとこのアイデンティティーなることばは、1950年代にエリクソンが含蓄のある概念的提起をしてから、単なる哲学的・精神医学的用語としてだけでなく、心理学・教育学・社会学用語として一般化されたものであった。

このことばの日本語的意味としては、「自己同一性」、「主体性」、「自己の存在証明」などとして理解されているが、それは自己の連続性・単一性、または独自性・不変性のことであり、また、個人のこのような同一性の意識的感覚のことを意味しているものである。また、ここでいう自己とは、主観的自己だけを意味するものではなく、対人関係や相互関係的な自己、いわゆる「……としての自己」を表すものである。

エリクソンがアイデンティティーを青年期の発達課題としたのは、青年期 (特にこの終わりの時期) が子ども時代の遊戯性や実験性から、おとなとしての「選択」や「決断」を余儀なくされる時期であり、いろいろな意味で価値葛藤の頂点を迎えるからである。

エリクソンは、青年期を心理的にモラトリアムの時代として考える。モラトリアムとは、もともとが経済的用語で、一定期間の支払い猶予、執行猶予の意味をしていることばである。青年期がモラトリアムに当たるとは、青年期の思想

や行動などに。しばらくの間。社会的な義務や責任を負わせないこと、いわゆる社会的義務や責任の決済を社会的に猶予することの意味なのである。この期間に青年は思想、行動、さまざまな価値観において自由に実験しつつ、自己の本当のものを選択し、自己統一性を確立していかなければならないのである。こうしたとき、青年は身体的・性的に成熟し、おとなであるにも拘わらず、存在的・心理的にはおとなとして見なされない、相応に評価されない、このようなところに葛藤が生じるのである。客観的条件に反して、青年はおとなとしての意識、おとなとしての役割や立場を主張したいし、そう見なされたいのである。

エリクソンは、アイデンティティーやその拡散(diffusion)の病理を次のように典型的に示している。

- (1) 同一性意識の過剰
- (2) 選択の回避
- (3) 親密さの拡散
- (4) 時間的展望の拡散
- (5) 勤勉さの拡散
- (6) 否定的同一性

(1)の同一性意識の過剰は、たとえどんな方向に向かっているにせよ、他のアイデンティティーを模倣しようとする時に起こる。特に急性の場合「肉体的親密さ」や「決定的な職業選択」、「激しい生存競争」、「心理・社会的な自己定義」などに、同時に身を賭けることの要求の様なときに顕在化するのである。

(2)選択の回避—どんな選択・決断にも葛藤を起こし、決定的な職業選択や心理的・社会的な自己定義をも回避してしまうことから麻痺状態をおこしてしまう。

(3)親密さの拡散—これは同一性意識の葛藤に引き続く核心的な葛藤である。他者とはんものの「関わり合い」を結ぶことは、たしかな自己確立が未完成の場合には特殊な緊張が経験される。この緊張のために、「関わり合う」ことに気がつかったり、内的な緊張のためにそれを

控えたりする。この種の緊張を消せない時、自分を内的に独立させてしまい、ごく形式的な対人関係だけに身をおくことになってしまう。そうでなければ、熱狂的な企ての後、陰うつな挫折状態に陥ったり、全く親密になれそうもない相手と親密になろうとしたりする。この親密さとの対照は「距離を置くこと」である。

(4)時間的展望の拡散—青年期が極端に延長されると、切迫意識など時間体験に極端な私たちでの障害が現れてくる。この場合、青年は大変幼く、まるで赤ん坊のように感じるかと思うと、もはや若返れなくなってしまったほど年をとったように感じてしまう。これは時間が変化をもたらす可能性に対する決定的な不信と、それにもかかわらず、時間が変化をもたらすことにたいする激しい恐怖からなっているものである。

(5)勤勉さの拡散—自分の勤労感覚の急激な崩壊に悩む場合である。やらなければならない課題に集中できずに、一面的な活動でのへの自己崩壊的な没入への形をとる類である。

(6)否定的同一性—自分の家族や身の周りのもの、あるいは身近な共同体から適切で望ましいものとして提供された役割や同一性への軽蔑や憎悪となって現れること。あるいは、これらと反対なものへの過大評価の類などである。

青年期にこうした病理に陥らず、アイデンティティーの拡散に対処しなくてはならない。モラトリウムは、青年期だけに特有のものではない。子どもの時からこうした特性は見られるものである。ただ、青年期においては決定的な形であらわれてくるということなのである。幼児期からいろいろな遊びを通して、同一化を図り、自己同一化を確立していかなければならない。先にふれたように、成長・発達のそれぞれの段階と過程のうえで、相応の訓練・教育を通じて適切な発達を図り、青年期においての急激な変動とそのショックのために、確かな方向性を見失ってはならないのである。

## 4章 子どもの教育と発達の場合

### 1 子どもにおける非社会性と反社会性

子どもに人間的成長発達においては、数々の問題が生じてくる。次にそういった低年齢時期に起こってくる具体的問題について検討したい。子どもの問題行動は非社会的行動と反社会的行動にわけられる。まず、非社会的行動としては、内気、消極的、登校拒否、家出など苦痛を与える社会的場面から逃避しようとして生じる問題である。主な原因は、一つ目に親の評価態度に問題がある場合が挙げられる。

この社会性に関する問題は、判定基準がとくにあいまいで教育相談の担当者からいえば、子ども自身には特に問題がなく、母親(時には養育者、教育者)の期待願望から子どもの現状がズレているにすぎない、ということがよくある。となりの子との比較で安易に消極的と決め付けたり、母親自身が社会性豊かであるために、必要以上に子どもを引っ込み思案な子と思い込んだり、母親が幼い頃内気、消極的で損をしたという思いが子どもに反映されたり、といった具合に、いずれも子ども自身というより母親の評価態度に問題があるといつてよいのである。

これは、頭では「一人ひとりの個性に応じた子育て」ということは十分分かっていても、我が子のことになると、親の側の期待、願望が前面におどりでてしまう。親心といえこれでも親心かもしれないが、内気、消極的と親からいい続けられる子どもは「自分は内気で消極的なのだ」という自己概念を早期に形成し、固定化させていくことにもなりかねない。親サイドで一方的に子どもを評価してしまう。親自身の体質の改善に焦点をおいた助言が必要である。

また、二つ目に客観的に子どもに非社会性の傾向があるといつても、何か直接原因があつてもというより、むしろそれが個性という場合がある。パーソナリティ形成は、遺伝と環境の相互作用の過程で形成されていくが、ニューヨーク大学のトーマス(Thomas・A)は、生まれて間もない子どもを観察して、そこにすでに三

つのパターンがあることを報告している。その原因は次のようである。注

- ・手のかからないタイプ
- ・取り扱いの難しいタイプ
- ・何をするにも時間がかかるタイプ

生まれて間もないころであることを思えば、この結果は環境的要因というより、もって生まれたものが確かにあることを示唆している。心理学ではこれを気質という言い方をしているが、内気、消極的といわれる背景にこの気質が関与していることも考えられるのである。また、遺伝的要因とまで言わなくても、人生早期に形成される性格傾向は、気質と同じような変わりにくさを持っている。内気、消極的な傾向はこの子どもの個性であり、この個性を尊重する必要がある。気質に類する個性はもともと悪いの評価対象になるものでもない。そういう個性を持っているというだけのことである。集団場面では多少問題になるかもしれないが、その子が駄目な子であると決め付けずに、人間全体に目をやり、その個性をいかに伸ばすかが重要なのである。

三つ目に直接的な原因があつて起こる、内気、消極的がある。例えば、友達にいじめられたりとか、皆の前で大きな失敗をしたとかいうものである。精神的エネルギーの豊かな子は反発していくのでむしろ次に述べる反社会的行動になっていくが、精神的エネルギーの乏しい子どもは、集団からはじきだされていく。家族関係が安定していない時も、気持ちが遊びに集中できず、集団にとけこめないこともある。

四つ目にしつけの失敗が挙げられる。低年齢期は社会性を育てていく最盛期であるが、親のしつけ態度により、その発達は阻害されてくる。中でも問題になるのが親の過保護、過干渉である。過保護は親が子どもを手を受け、先取りしてやってしまうことが多く、子どもなりに体験的に学習していく部分が希薄になっていく。家の中では元気がいいのに、一歩外にでると緊張は高まり、動きは止まってしまう。過干渉も同

様で、何をやるにしても親の干渉がつきまとうので、子どもは自らの動きを放棄し、親の言うままにしか動けなくなってしまう。低年齢期の登園、登校を嫌がる子には、これらのしつけ上の問題が背景に潜んでいる場合が多いが、とくに登校拒否は対応を誤ると長期化することがあるので専門機関での相談が望まれる。

それでは、もう一つの問題行動、反社会的行動について述べたい。この反社会的行動とは、わがまま、乱暴、落ち着きがないなど、他に対して直接・間接に迷惑を及ぼすものを逸脱またはその周辺行動を総称するという。低年齢児ではそれほど問題にならないが、盗み、万引きなどの非行もこれに入る。その主な原因をあげると一つ目に、非社会的行動と同じく、子ども自身の問題というより親の評価態度に問題がある場合などがある。例えば親は落ち着きがないというが教育相談の担当者からいえば特に問題はなく、強いていえば外界への興味関心、好奇心が旺盛で元気のいい子というだけのことがよくある。この時期の子どもは自己統制力がまだ不十分であるから落ち着きのなさ、わがまま勝手は一面では当然のことである。おとなしいタイプの母親であったり、そうでなくても上何人かの女の子を育ててきて男の子が生まれてくると、動きの大きいことが必要以上に問題視されてしまうことがある。非社会的行動の時と同じく、親サイドの一方的な子どもの見方を改善していくように指導していくことが必要になってくる<sup>(19)</sup>。

二つ目に同じように個性である場合があげられている。心身ともにエネルギーが豊かであるとか、動きが大きいといった特性は多分に気質的である。しつけ上の問題や内的葛藤、欲求不満がない場合は、むしろ個性としてとらえたほうが妥当である。このタイプはいわば行動の振幅が大きいので、結果的に他とぶつかりあうことが多くなり、家庭でも園でも問題の子とみられがちなので注意するべきである<sup>(20)</sup>。

この場合も非社会的行動の時と同じく集団生

活をしていくうえにおいて、最少限度の自己統制力を身につけるように指導していかなくてはならないが、借りてきた猫のようなおとなしさを期待するのは、個性をいい形で生かしていくように、周りが努力していくべきなのである。

三つ目に反応性のものがある。これは家庭あるいは園や学校で何か葛藤、欲求不満があり、その反応として起こってくるものである。兄弟関係、友達関係の不調が原因してくることもあるが、中でも親子関係、先生との関係は重要である。子どもは皆、親あるいは養育者、教育者に受け入れてもらいたい基本的な欲求不満を持っているが、それが阻害された時精神的エネルギーの豊かな子が、乱暴・反発などの形でリアクションを示すことが多い。こういった子どもの態度に接すると、親は多くの場合は叱責などにより一方的にこれを抑制しようとし、悪循環が繰り返されていくのである。反応性のものは、どこかに直接の原因があるのだから、子どもの言動に冷静に目を注ぎ、耳を傾け、その原因を見つけて出していかなければならない。

四つ目にしつけの失敗が挙げられる。子どもに大人のような自己統制力を期待することはもともと無理なことであるが、その年齢に応じた統制力、価値規範・価値基準は身につけていかなくてはならない。しかし、親が溺愛タイプであれば、子どものやることなすことすべて許してしまうので、自分本位の行動は修正されず、ずっと続いていくことになる。これでは相手があること、置かれている場の認識、我慢、辛抱といわれるトレランスが育たない。結果的には集団の中でうまく調和することが出来なくなってしまう。また、放任タイプの場合も同様である。溺愛タイプと多少ニュアンスの違いはあるものの、結果的にはしつけられるべきものがしつけられず、子どもなりの「いい、悪い」の判断ができず上手く調和できなくなる。

次に五つ目として病理的原因から起こってくるものがある。いわゆる「多動児」といわれる背景には、脳炎、脳膜炎などの後遺症、頭部外傷、

てんかん、微細脳損傷(MBD)などで代表される脳機能障害や脳機能不全があったり、原因はまだよく分かっていないが自閉性の障害があったりすることがある。多動性、微動性、興奮性などが時や場所をこえてあまりにも目立つようなことがある。これについては専門機関での相談が必要になる。

これまで子どもの非社会的行動、反社会的行動という問題について述べてきたが、低年齢児の問題、なかでも不適応状態にある子どもの対応の基本は、母子関係の安定である。これが確保されていれば、それほど心配することはないといつてよいのである。多くは時間経過の中で改善されてゆく。少なくとも悪化していくことはあまりないのである。母子関係の安定が確保されていなければ、打つ手はすべて裏目にでてしまうといつてもよい。母子関係の安定こそは問題の子にとどまらず、子育て一般の原点なのである<sup>(21)</sup>。

## 2 人間形成と子どもの生活の場

人間は日常繰り返される生活と文化の接触のなかで発達していく。それは人間関係のなかで果たされる。今日では、その生活と文化が大きく変わり、子どもをとりまく人間関係も成長のすべての過程を通してその変化が広がっている。

子どもたちは生まれるやいなや、マスコミ文化のなかに投げこまれ、その最初の発語にもテレビ文化の影響がみられることがあるというのである。子どもの遊びも変わり、幼児であってもファミコンに我が子の魂を奪われたと嘆く母親も多い。そのため本が好きな子どもは減り、つぎつぎに変わる人気テレビ番組やテレビゲームを知らないものは仲間からはずされいじめのいけにえにされやすいともいう<sup>(22)</sup>。

例えば、塾通いの小学生の唯一の遊び場が夜半を過ぎた駅のホームであったり、塾仲間との電車の中でのふざけあいだったりする。子どもが家庭から外にでて接するいろいろな場が子どもにとって大事な成育環境となるのである。そ

の場所が自然豊かで地縁・血縁の存在する旧来からの農村地帯であるか、都会地ではあるが古くからの文化、伝統や豊かな人情の残っている下町地区であるか、古い文化や伝統を持たず、人との交流に乏しい新興住宅地であるかなどによって、子どもに関わる環境もかわり、成育環境としてはずいぶん異なってくる。

地域が子どもの成育環境として優れている条件は、子どもにとって魅力的な自然や自由に遊ぶことのできる遊び場が存在すること、安定して集える遊び仲間が存在すること、お互いに子どもを育てあえる地域の豊かな人間関係が存在することなどである。

また、「子どもの生活は遊びが中心である」といったのは世界で「幼稚園の父」といわれるフレibel (F・Frobel) であった。彼は19世紀のドイツにあって、幼児の遊びを発展させるための道具の製作にとりかかり、これを恩物 (Gade) として作り上げたことは有名である。子どもは大人とは異なった存在であると気づいた時、最も子どもらしい特徴として認められたのが、遊ぶ存在だということであったのである。

それでは幼児にとって遊びとはどういうことであろうか。大人の生活は、仕事と遊びが未分化であり、仕事も児童期以降にはじまり勉強も遊びとして行われるところに特徴がある。したがって、余暇として遊んだり、仕事や勉強の休息として遊ぶのではない。幼児にとって遊びそのものが目的なのである。

幼児期のみならず、子どもは遊びを通して主として次のような能力を発達させる。

① 社会性の発達—子どもは友達と遊ぶことによって他人との付き合い方、ルールや約束ごとを守る態度、個人の役割や責任を学び、他人の立場を身につけていく。

幼児期は自己中心的なので他人の立場が理解できずにけんかになることが多い。しかし、幼児はけんかを通して他人を意識し、他人の立場を理解する機会になるのである。

② 自立性の発達—幼児にとっては、遊びが

親子分離の機会になる。友人との遊びの楽しさにつられて、しだいに親の手から離れて遊び生活する能力を身につけていくことになる。

③ 知的能力の発達—子どもは、遊びを通して工夫する力、創造する力を養う。遊びは自発的な活動なので自由に想像力や好奇心を通して知的能力の土台を培うのである。

この時に幼児期はことばが発達する時であるが、友達との遊びの中では、今までことばを話さずとも自分のやりたいことを分かってくれていた母親や養育者と違い、お互いの意志を通じ合うのはことばにならざるを得ないので、ことばの発達を促すことにつながるのである。

④ 運動能力の発達—遊びの中では、自然に足や腕を使い、知らず知らずの中に各種の運動機能を発達させる。また、外の空気を吸い、自然に触れ、日光を浴びて身体を動かせば身体のはか心が健康になる。運動的な遊びを通して、幼児は健康を増進させることができるのである。

⑤ 情緒の発達—遊びに夢中になっている子どもの顔はいきいきと輝いている。遊びは幼児の情緒を安定させる。また、自由な遊びの中で自己表現することにより欲求不満を解消させたり、自己充実感を味わうことができる。また、友達と一緒に喜びや怒りを共感しあうことにより情緒が発達するのである<sup>(23)</sup>。

このように子どもの生活の中心といわれる遊びは総合的な活動であるので、遊びを通して多面的な能力を発達し、人間形成に大きく役立つ重要な活動なのである。

その子どもたちの遊びの実態は昔と比べ生活環境の変化により大きく様変わりしている。子どもは家庭、幼稚園や保育園、学校などの集団保育の場、地域の公園や空き地などの生活の場で遊ぶが、先にも述べてきたように、最近ではテレビ視聴やテレビゲームなど体を動かさないで一人で遊ぶ時間が増え、とくに戸外での友達と遊びをしない子が増えている。これは、昔との運動能力低下にもつながっている。

最もよいのは危険のない遊び場に適した環境

が家の近くにあり、一人で出かけていって自由に友達と遊ぶことが社会的人間形成を進展させるのに良い条件である。しかし、現代の子どもは本来的に遊ぶ存在であるといっても、自由な時間と場所と友達の三条件がその子どもの発達に適した形で揃っていないと十分に遊ぶことができないのである。また、朝の起床にしても母親に起こされ、その指示、命令によって生活する。つまり自分の生活を自分でデザインすることが今やほとんど子どもには許されていない。児童期ともなると、下校すると塾や習い事に追い立てられる子どもがでてくるのが現状である。そういうなかで唯一自分が主体的に主人公の行動を考えて決め、その通りにコントロールすることができるのがテレビゲームやファミコンの世界になるのである。

そこでは、自分で考えてやってみたことで失敗したとしてもだれにも叱られないし、文句も言われない。主体的に自分の思いで行動できる場がその世界に限定されているといえるのかもしれない。子どもの主体性を伸ばすためにも子どもが友達と外で遊ぶことはとても重要なのである。

## 総 論

現代社会は、人類の文化と人間の生活の歴史にかつてない変化をもたらした。とりわけ、経済成長と高度産業社会の発展は、人間生活の様式を大きく変え、その影響は人間の意識、態度、行動そして子どもの考え方、感じ方のレベルから人格の深部まで及んできている。

問題は子どもだけにあるのではない。現在大人たちが自分たち自身の生き方に確信を失い、自らを失っている傾向の強いことも関係するのである。そこには学歴偏重になり、子どもが自由に遊べる時間が減り、子どもの社会性が育成されるのを妨げている現状があり、核家族化が進み、狭い視野のもとで育児ノイローゼの母親から虐待を受けている子どもの増加があるのである。発達しつつある子どもにとって親子関



係は一つの環境といえるのである。文化の発展とともにわれわれを取り巻く環境が複雑になり、親子関係も生物学的結びつきを超えて、より複雑になってきている。

また、大人へ気をつかい精神的自由もなく主体性のない子どもも数多く存在する。現代社会のもつ能力主義的構造が子どもの知的発達、特に精神発達にも大きく関わってくるのである。ここでの「能力」とは、子どもがやがて「社会」にでてゆくとき、少しでも有利な地位や職業につくことができるのに役立つ能力に限られているのである。

つまり、現在社会においては、社会にでてからの市場的価値につながる能力によってのみ、子どものときから人間的価値が評価されてゆくのである。

このような中で、知能が優れているということは、それだけで本人、社会が幸せになれるのではなく、優れた適切な能力をつくる知能がよく生きられるように役立てられなければ、かえて本人、社会が不幸になってしまう。つまり、子どもの周りの養育者や大人は優れた知能がよく生かされるように育てるという意識が必要となる。知能が優れていることが人間的価値を高めるのにつながるのではなく、社会性、芸術性、運動機能性、そして知能などの発達をバランス良く促せるように努めたい。

そして、これからの社会を担い未来を創る子どもに対して養育者でなくとも、社会の構成員の一員として責任を感じるべきである。子どもの人間関係の発達は、関わることでできる人の多様性や数の広がりとなるし、その人間関係が子どもの発達のさまざまな側面に肯定的、あるいは否定的な影響を及ぼし得る。また養育者との関係は他の人間関係と調和しながらあるいは補いながら成立していくべきものであることを頭においておかなければならない。

最近も、学生の学力低下や質の低下がとりあげられているが、十年後、二十年後に発達、成長した子どもたちが、のびのびとした個性を持

ち、たくましく社会にでられるように教育者だけでなく、社会全体で子どもの育成に真剣に取り組んでいくべきである。そして、私もたくさんの子どものよい影響や刺激を与えられるように日々努めていきたいと思う。

## 謝 辞

本論文を執筆するにあたり、教育・福祉の先生には大変お世話になり、たくさんの御指導、御鞭撻をいただきました。また、人間として、自分がこれからどうあるべきかなど多くの面で学ぶことが数多くあり、視野や考え方が広がったような気がします。ありがとうございました。

## 参考文献

### — 1 章 —

- 1) 久世妙子：子どもの発達心理学 有斐閣双書
- 2) 宮嶋邦明：発達と教育の心理学 法政出版 p.3
- 3) 久世妙子：子どもの発達心理学 有斐閣双書 p.48
- 4) 家庭一般（高校教科書） 実教出版 p.62
- 5) 青年期の発達と学習 藤原喜悦 学芸図書
- 6) 中西信男編：人間形成の心理学 ナカニシヤ出版
- 7) マスローA・H、小口忠彦訳：人間性の心理学 産業能率大学出版部  
西川隆蔵：自己理解のための心理学 福村出版

### — 2 章 —

- 8) 宮嶋邦明：発達と教育の心理学 法政出版
- 9) アヴェロンの野生児 イタール中野他訳 福村出版  
シング、中野・清水訳：狼に育てられた子・アマラとカマラの養育日記 福村出版
- 10) 無藤隆・柴崎正行編：児童心理学 ミネルヴァ書房
- 11) 中川英一：成育環境と子ども～「子ども」のよく分かる本～ 高文堂出版 p.48

- 12) 中川英一：成育環境と子ども ～「子ども」のよく分かる本～ 高文堂出版 p. 52  
鈴木隆男：発達心理学の基礎 I ライフサイクル 平山諭 ミネルヴァ書房  
講座 心理学11巻 東京大学出版会 精神発達心理学 波多野完治 大月書店

— 3 章 —

- 13) ローレンツ著 日高敏隆・羽田節子訳：行動は進化するか  
14) ハーロウ著 梶田正巳他訳：ヒューマンモデル 黎明書房  
15) 西川隆蔵：自己理解のための心理学 福村出版 p. 37  
16) 大都市における児童・生徒の生活・価値観に関する調査報告書 平成11年11月 東京都生活文化局  
17) The Psychology of Parent-Child Relationship Symonds (1937)  
18) 深谷昌志編：子どもの価値観 大日本図書  
・東京の子どもと家庭 社会福祉基礎調査報告書 平成5年度 東京都  
・大都市青少年の生活・価値観に関する調査 平成10年 東京都生活文化局  
・家庭のしつけ 家庭教育選集 金子書房

— 4 章 —

- 19) 久世妙子：子どもの発達心理学 有斐閣  
20) 高野清純編：子どもの発達とつまずき 教育出版  
21) 北尾倫彦：子どもの心理と教育 創元社 p. 213  
22) 堀尾輝久：人間形成と教育 岩波書店  
・岩田純一：児童の心理学 有斐閣双書  
・清水新二編：家族問題—危機と存続— ミネルヴァ書房  
・飯田哲也：家族と家庭 学文社  
・村井・小山・神土共書：発達心理学 培風館  
・平井誠也編：発達心理学要論 北大路書房  
・岩田純一他共書：発達心理学 有斐閣双書